

<参加申込みフォーム質問内容> 公開プレゼンテーション大会出場者の KAIZEN 策(【A】～【E】)について、または、芸術環境における課題全般について、日頃感じておられること、ご意見・ご提案等をお聞かせください(複数可)。

【A】ヒトミテ プロジェクト: アートマネジメント動画ブログ「ヒトミテ」

【B】芸術団体のためのファンドレイジング・アクション・コミティー(FACA):

芸術団体のための「ファンドレイジング・オペレーション・ハンドブック ～個人寄付開拓編～」作成・発行および関連企画

【C】NPO 法人 FPAP: IT を活用した、アートマネジメントセミナー等のネット配信

【D】山崎広太: 新人振付家育成のためのスタジオシリーズ

【E】NPO 法人リアルシティーズ: REALTOKYO オーディエンス支援プログラム「オーディエンス・イン・レジデンス」

「アートマネジメントの課題全般」について寄せられたコメント

- ・ 今回の趣旨とは少し離れるかもしれないが、芸術における一番の課題として、芸術関係はその他の仕事とは違って直接的に社会の利益につながるものではない。ですから企業や社会情勢によって活発になったり衰退したりするのは仕方がないものと考えますが、それでも芸術に資金をつかうことは有効な利用方法と思う。アーティスト側からすれば、作品を作ることによって生活ができる、作品づくりに集中できる環境をもつということは一つの夢だが、企業側からするとどういう考えで何を求めて資金をだすのか。それは今回企画をされているトヨタさんにも質問したいが、社会的に、会社的に、経済的に芸術活動を支援することはどのような意味・意義をもってなされていることか。それはまた観客に対しても同じ。
- ・ アートマネジメント全般についていつも感じることは、人々の共感や支援を得るのはアートの中身自体のパワー以外にはないにもかかわらず、そこが重視されていないというか、アートで何かやればすばらしいみたいなの甘さが見受けられること。アートマネジメント界とアーティストとの間に距離があるように感じる。
- ・ 現在の「アートマネジメント」のビジネス的側面と支援からなるもののバランスに関して興味をもっている。
- ・ 文化芸術部門は、日本にとっても得意分野であるにもかかわらず、その道で生きていくことは、まだ一般的ではない。それは、やはり世の中の文化芸術に対する環境がよくないからだ。芸術環境における課題にスポットをあてて、その改善のために活動する団体を支援しようとするトヨタ自動車にも興味がある。
- ・ 若いアーティストに対して、活躍できる場所を提供して欲しい。まず、御社のような力を持った企業が現代アートに対する日本人の認識を変えるような働きかけ、企業 PR を行って欲しい。将来の日本も、ひとりひとりの人生も車も、人が作りだすアートだと思う。
- ・ 敷居の高いアートがもっと身近になればすてきだと思う。
- ・ 職業としての業務を発生させる可能性が高まるかということが一番の改善すべき点なのでは。
- ・ 文化芸術部門は、日本にとって得意分野であるにもかかわらず、その道で生きていくことは、まだ一般的ではない。それは、やはり世の中の文化芸術に対する環境がよくないから。芸術環境における課題にスポットをあてて、その改善のために活動する団体を支援しようとするトヨタ自動車にも興味がある。
- ・ 芸術、芸能関連の若者支援に携わったことがある。トヨタ自動車がクルマとは一見関係のないような分野を支援し助成を行うということに関心がある。上記のような団体や組織が活躍するためには、やはり広い認知と実績が必要かと思いますが、ひいては、日本の経済成長などにもかかわってくることであり、今後の日本にとって、芸術環境の整備は必要不可欠だと感じている。
- ・ アートマネジメントとか指定管理者制度とか新しいコトバばかりが先行しているが、実質日本の芸術やアーティストを支援する土壌は欧米に比べ、思うに大きく出遅れていると感じる。種を蒔き、芽を出し、葉をつける前に栄養不足で枯れてしまうような有様ではないだろうか。今回このイベントを知り、そんな考えが、悉く覆されることを願って参加を希望。
- ・ 若いアーティストに表現の場を提供してあげて欲しい。御社のような日本、世界ナンバー1 の企業が、若者の表現の場を開拓して欲しい。企業としての社会貢献をアートという切り口に焦点をあてることにとっても意味があると思う。よりよい日本を作るため、心がこもったアート作品があふれる世の中を想像して欲しい、すばらしいじゃないか。アートとは、思いがこもった、人が作りだす物であり、車であり、人それぞれの人生でありその人生が集まった、日本、世界であると思う。
- ・ 21 世紀の成熟社会に「アートマネジメント」は不可欠。IT その他、あらゆる手段を駆使して普及を図りましょう。
- ・ 国内の文化・芸術活動を活性化し海外へ発信していくためには、アートマネジメントという分野をもっと成熟させる必要があると常に感じています。今回の取り組みをぜひ参考にさせていただければと思っています。
- ・ 日本における芸術界はヒエラルキーが存在し新しい能力ある若手の育成の部分で遅れている点が多々あるため、今回の各提案を興味深く拝聴したい。
- ・ アーティストと社会があたりまえのように繋がる環境、アーティストが普通に生活を保障され、‘社会の中で’ ‘社会に向けて’ 安心して創作活動ができるそんな環境であればどんなにいいだろうかと思う。才能を見つけ出し、きちんと育て、咲かせ、広める、そういうことがもっと精力的にできる社会であったら、日本からもっとたくさんの真に喜ばれる芸術が生まれ、国民にとって、世界にとっても、豊かな時間と財産が増えることだろう、と思う。国の芸術への価値が問われる問題なのでしようが。一步一步、こうした問題を投げかけていくのは、いい試みだと思う。

- ・ 東京から地方都市に住まいを移したが、芸術に触れられる機会やアートマネジメントされている場が少ないことを実感している。地方都市に住む人を含め、幅広い人が芸術に触れて価値を知ることができる機会ができればいいと思う。
- ・ 日本にもっともっとアートが根付けばいいと思う。アートを通して人々に幸せと感動をもたらせたいというのが私の信念であり、そのために何ができるのか日々奮闘している。
- ・ 芸術における課題として、聴衆が育っていないということを感じている。
- ・ 日本のアートシーンをさまざまな方法で改善していく必要を感じる。答えや手法は一つではなく多々であり、その相互作用も必要であり、常にその方法を更新していく必要を感じます。総合的にはアートを特別なものではなくもっと親近であることをどうにか一般の人々(マス人口)に伝える必要がある。その手法もさまざまだが、私としては教育(義務教育～社員成人教育)でアートのことをもっと取り入れる必要を感じます。
- ・ 一般的にまだ「芸術」がそれほど身近でないこと、一方で芸術家や催しを企画する側からするとまだ手探りで芸術の社会的な意義が確立されていない…と、両者の間にある何か大きな溝がまだまだ根深い気がしてならない。たとえばファッションがいいのか映画がいいのかわからないが、割と親しみのあるジャンルを入口にして、何か普通の会社員・主婦・子どもたちが違和感無く触れて感動できるよう「芸術」の立ち位置を皆で考えられたらと思う。
- ・ 現在の日本の社会では、日本の質のよい ARTIST、海外で日本での発表の場を求めている Artist にとって広く門戸を広げられているという状況ではないという現状を感じている。個の判断がされにくく、Art 作品への MOTIVATION が欧米に比べて生活に密着していない部分も改善していくべき課題だと認識している。
- ・ 日頃、アートについて身近なレベルで考えたときに、「興味は持っているけど疑問に感じたことはない」というような、(マス・)メディアから与えられた情報のみを鵜呑みにしてそれを自身の興味の範囲と決めてしまっている人が多いように思える。例えば「年に1~2回、大型企画展のようなところに名画と呼ばれる絵画を見に行く」、この行為が芸術に関わる行動のすべてと思っているような人が多いということだ。しかし、私は、芸術とは定義しきれないほどあらゆる可能性を秘めているものだと思うし、その可能性をもっと国民単位、世界単位で考えていくことが大事だと思う。日本について言うと、物質的には非常に豊かになっても、文化的側面から言えばまだまだ足りない状態と言え、このようなことが「歪み」として表層化してきているのではなからうか。しかし、芸術文化の花開く種のようなものは昔からの日本文化からも考えても日本人は大いに抱えている可能性があると思う。だからこそ、もっと社会の中に身近に芸術が取り込まれるような環境づくりが必要だと思う。鑑賞するもの、表現するものももっと自由に、そして質の向上を目指すためには、さまざまな人がさまざまな場所で疑問の波紋を常に拡げていくことが必要だと思うし、私は芸術の可能性について、この先も考えていきたいと思う。
- ・ 地方、それも中山間地や限界集落を抱えた地域におりますと、鑑賞者開発や資金調達面で、道州制などもにらみつつ、特に広域地域圏内での、芸術創造団体、文化施設、アートマネージャー間の相互のネットワーク、情報共有がより緊密に図られる必要があるようにひしひしと感じます。
- ・ 稽古場所がない、創作活動の場がない、発表の機会がない、研鑽の機会がない…。ある特定のアーティスト等を対象にした問題ではなく、普遍的な共通認識とされる課題を解決する担い手の支援・発掘する基盤づくり。
- ・ 舞台芸術の『ウラカタサン』を養成、育成する場の提供が少ない。
- ・ 学生への資金、マンパワーの協力を強化してほしい。
- ・ アートマネジメントもさることながら、いろいろな人にそのアートに参加してもらうための施策について、いろいろ検討が必要と思う。
- ・ 大型展ではない展覧会を、どう一般に広報していくか。
- ・ 指定管理者制度がひろまる中、公共文化施設や異分野への関係作りには、個人のアートマネージャー、プロデューサーの必要性を感じている。個人の弱いところは信用性と財政基盤。信用性については個人によるところが大きいと思うが、財政的には、文化庁の国内研修制度のようなサポート体制の充実が必要かと思う。
- ・ こうしてネット配信やホームページを作成していくことはいいと思うが、結局大切なのは、ではそこで作成したページを、どうやってターゲットに伝えるかだと思う。その際、いきなり新しい層をターゲットにするよりも、まずは既存の顧客を抱えているところとうまく組むなりして広げていくといいと思う。
- ・ 文化行政の行き詰まりを、NPO の方々の積極的な提案を拝見することで、刺激として、将来を考えていきたい。
- ・ 「木を見て森を見ず」ではなく、木も当然見るし、樹木の音や匂いも知る必要があるが、もっと地球規模の俯瞰視野を以って「芸術環境」を掘り起こさなければならないと考える。私たちが現に今行っているプロジェクトは、一人の写真家の作品が発端になって進めているが、「芸術環境」を考える上で、国際社会との連携の上に立った視野が必要だと考える。
- ・ 課題解決に向けた個別の活動はいろいろ行われているが、ネットワーク化するための仕組みが必要と感じている。そのためには、余程の成功モデルを提示して共有するか、多くの団体／個人が参加しやすいプラットフォームのようなものをつくるのか、今回のプロジェクトには、前者の部分を大いに期待している。
- ・ アートマネジメント全般についていつも感じることは、人々の共感や支援を得るのはアートの中身自体のパワー以外にはないにもかかわらず、そこが重視されていないというか、アートで何かやればすばらしいみたいな甘さが見受けられること。アートマネジメント界とアーティストとの間に距離があるように感じる。
- ・ 2010 年以降の経営資源としてのアートの可能性や、貴社の活動が現在どのように展開しているのかに興味を持っている。他にも、アートを経済活動に取り込むために活動している NPO 法人にも興味がある。
- ・ 以前、芸術家のくすり箱のイベントにスタッフ参加した。特に Performing art を行うアーティストが対象でしたが、身体を酷使するにもかかわらずサポートの体制(当日は健康診断やピラティス講座などあり)はほとんどないことを知りました。行って楽しむことももちろんアーティストを支える重要なことである

と思うが、彼らが芸術活動を続けていけるような環境作りとサポートが今後もっと必要となってくると思う。

・ こういう疑問に対する答えのようなものが今回のプレゼンテーションで自分なりにも見つけられるといいなと思います。

・ 課題だらけ。日本社会全体の課題でもある。

・ 現代の日本の文化環境の中で自らが何をすべきが、何をしたいかをしっかり問い直すべきと思う。

・ また、西洋直輸入型の文化活動・運営方式を疑問なく続けていくのはそろそろ止めた方がいいと思う。また、「アート」への幻想自体も問い直してみては？

・ つまり、もっと個々人にとっての「アート」とは何かを再発見・定義してみる必要がある。

・ 弊館内に数多くのアート作品があるが、その存在効果とこれから検討していかねばならない、大規模施設の環境配慮策の施策が必要になってくるため、その材料探しに今回是非参加したく思っております。どうぞよろしく申し上げます。

・ 私たちのような全員俳優の集団にとって、アートマネジメントの存在が将来を決めるといっても過言ではない。演劇界では、始まってすぐの元気な若者集団やいくつかの目に付いた集団は観客もいっぱいにできる。しかし、長年にわたって地道に活動してきた集団が必ずしも観客動員画うまく言っているわけではない。人気があるから芸術性が高いともいえない。元気のいい、人気のある劇団の問題よりは、芸術性が高いがまだ人目に触れていないものをどうやって育て、発展させていくか、観客の質の向上をどうやってあげて行くかを考え、10年単位のプロジェクトのシステムが日本に出来上がれば、いろいろの人たちがそのプロジェクトを利用でき、文化として根づくと思う。

・ 自分自身がずっと舞踊の教育・普及に興味があったが、昨年、美術館でインターンを経験し、舞踊だけでなく、芸術全般に対して普及という観点に興味を持った。環境改善というのは、つまりは、芸術の浸透・普及へとつながることではないかと感じ、今回のプロジェクトはとても楽しみ。

・ 日本においては、舞踊(ダンス)の大学教育が、他国に比較して少ない上、内容が充実していないように思う。欧米だけでなく、隣国の韓国には多くの大学に舞踊の学科があるというのに、比較してみると、日本では乏しく感じる。自分が、舞踊教育という学科の卒業生だが、学びたいことが学べず、入学した当初、友人たちと落胆したことを思い出す。舞踊というと、どの舞踊?となってしまうかと思いますが、ジャンルに捉われず、理論・実技両面から広く身体表現を学ぶ、舞台芸術を総合的に学ぶといった大学機関があれば良いのに、とこれからの人達のことを考えても、切に願う。そこから、踊り手だけでなく、振付家、演出家、照明、衣装、評論家、指導者、マネジメントのできる人、コーディネーター、など、幅広い人材が誕生していったら、今の状況も変化していくのではないかと。人材を育てることが大きな変化への一歩となると思う。

・ 私が住むような田舎と違って東京などの都市の方が圧倒的に芸術に触れる機会が多いのは、人口差を考えれば仕方ないのかなとは思いつつも、不公平感を抱いてきた。都市では、大企業がメセナ活動に力を入れ、官だけでなく、民間の施設も多いのに、地方では、ほとんど公の施設がメインで、芸術に対する情熱の入れ方も各地方公共団体間で温度差があるし、財政危機のおおりも受けているのが現状。おまけに、運営団体ときたら、公務員の天下り団体という地方公共団体も

・ これまで芸術分野は他の分野と比べて一見すると企業や財団から資金を獲得している分野かと思っていたが、まだまだNPO が取り組むべき課題が山積していることをやっと知った。

・ 都道府県をはじめとした厳しい地方財政の影響を受けて、各地の文化施設の運営などは混迷を極めている。これまでのように、美術館をはじめとした文化施設をつくることに重きを置くのではなく、全国各地に数多く設置されたこれらの施設を如何に有効に運用するのがそれぞれの設置者に求められているのだと思う。一方で、これらの施設(美術館など)と現代美術(現在の美術/作品、作家、関係者)との関係は希薄に感じられ、日本における現代作家の意識は国内のこうした文化環境からますます離れていくのではないかと危惧している。海外に意識を転じると、現代アートや自国の文化資源に対する戦略・意識が高まっているように感じられ、国内の状況とはかけ離れているようにも感じられる。グローバル化する社会では芸術・文化の価値は一層高まるに違いない。A・C など芸術・文化環境の有効な改善策を講じる必要があると思う。また、長く続けていくには財政基盤の強化も必要。B の個人寄付の問題を含め、必要なシステムの構築を図るべきではないか。

・ 日々常に考え続けていることだが、アートを実践することで社会に対してどのような役に立てるかという明確な説明ができなければ、アートマネジメントに対する風向きは良くなると思う。現場における改善点や、こんな風に変えていきたいという方向性は見えていても、資金調達やインフラを整備するのは自分たちの力だけではどうにもならないのが現状。今回のプレゼンテーションでは改善策を実践することでアートを取り巻く環境がどのように変化するかという観点でお話を伺いたい。

・ 感動のポイントがわからず離れていく人が多い→子どものころからバランスよくさまざまな芸術に触れる機会がもっとほしい、できれば。子どもも参加できる形で。大人も別途、気軽に見に行ける機会を作れないか(できれば生で)

・ 現代の日本ではうちに秘める並外れたパワーを持つアーティストが育ちにくい環境にある。

・ これ以上幼稚なアートを排出しないためにもアートを扱うマネジメントサイドの厳しい審美眼が問われている。

・ アートマネジメントに関してのこのような助成があることを初めて知りました。とても意味のあることだと思う。作品上演を支える経済環境については、舞台活動を行っているほとんどの団体が、苦勞していると思う。文化庁やメセナの助成金が、その大きな支えになっているという現実の中で、しかしてそのあり方に、疑問を感じる事が少なくない。

・ 関西において、芸術文化に関わる仕事/活動に従事する側のネットワーク構築の必要性を感じる。それぞれ小さいエリアで完結してしまっているのが、関西全体が活性化するような動きを、支える側からも提案していかなければならないように感じる。特に 30 代前後のこれからを担う世代のネットワークがあまり機能していないことが気になる。

・ アートプロジェクトの評価、アドボカシー、マネジメントについて。

あると聞いたことがある。都市と田舎での格差、なんとかならないものか？

- ・「注目の新人」と「著名人以外のアーティスト」への企業からの助成金は非常にに出にくい。運営方で工夫をするべきか(低予算)、それとも時間をかけてステップを踏むべきか、その他の事例などが知りたいと思っている。
- ・日本は欧米に見られるようなパトロンの仕組みがない。
- ・富裕層やオーナーへアートに対する造詣を深めてもらう活動が必要と思われる。
- ・インターネットによるユーザー同士のコミュニケーションが増加する中、アーティスト・クリエイターが自らの作品をPRしてファン層を獲得するなど、インターネットによるコミュニケーションメディアの重要性がアートシーンで注目されているが、リアルでの支援が圧倒的に少なく、今後の展開として、上記のようなバーチャルな活動の場とリアルを連動したクロスメディア化が必要と考える。
- ・ヨーロッパ式レパートリーシステムで演劇を上演する劇団に所属している。週2日の昼・夜、7つの作品を回替わり日替わりで一シーズン8ヶ月間上演。現在第四シーズンを終了したところだが、集客に頭を悩ませている。古典芸能は別として日本には同じ演劇作品を繰り返し見るという習慣がありません。優れた芸術作品には見る度に新しい発見があるもの。教会のように地域の方々が訪れるように、観劇が生活の一つに組み込まれ、自分の心の状態を知る機会を持つ事で、精神的に豊かな生活を送る助けになりたいと願っている。私達を求める人々に会う為のヒントを探しに参加したい。
- ・普段、芸術活動に関わっていない人々にとっては、アートはまだまだなじみの薄いもののように思われる。これからは、アートと一般の人々がつながる機会を作ること・それを社会におけるひとつの仕組みとして継続させていくことが必要に感じる。
- ・変なしがらみがなく、よいものを発掘するための目が正確であることを望んでいる。
- ・アートに対する企業支援のあり方、個人支援のあり方事例をできるだけ具体的な提案を期待しています。今後のアートマネジメントにおける方向性を考えていきたい。
- ・Web2.0のようなツールをアートマネジメントの中で有効に使う方法論などの提案があるといいと思う。
- ・限られた人の間で完結してしまいがちな芸術の分野を、より多くの人々に受け入れられるようにしていくにはどうしたらよいか。芸術を創り出す側の人たちが「これでいい」と開き直らずに、自ら動き出すことが大切だと考えている。…と云いつつ、自分自身は芸術の分野から離れた生活になっているのが現状だが…。当日、さまざまな提案を聞いて、自分なりのKAIZEN策も新たに見出せたと思う。
- ・私は大学院で、芸術への社会の理解をどのように広げていくか、そのための公的・私的サポートや非営利セクターであるNPO法人などがどうアプローチをしていくべきか、ということの研究している。まだまだ研究としては未熟だが、その中でも感じたことは、やはり欧米(特にヨーロッパ)は芸術への国の研究機関等がその成果を社会へフィードバックしているということ。そしてそれが、子どもたちの芸術教育や国の芸術文化振

興にとっても役立つのではないだろうかという理解をもった。今回のプレゼンテーション大会では、さまざまなジャンルの出場者の方々からとても貴重なお話を聞くことが出来ると思うので、それを自分の研究にぜひ活かすことが出来たらとても楽しみにしている。

- ・芸術の環境を変えるには、環境が変われと言う(人もまだまだ多い気がする)より、現場が変わるのがいちばん近道。現場の実務のやり方のひとつひとつの合理化や具体的な解決の積み重ね、および送り手・受け手の情報の扱い方——チャンネルの広げ方、より多くの人が公平に必要な情報にたどりつける/共有できるようなくみづくりが、現状を動かすと痛感している。その意味で、今回の5つの企画はどれも実現してほしいと思えてならない。
- ・日本には不在の舞台芸術の制作者の協会(のようなもの)の必要性。
- ・「アートマネジメント」という言葉のカバーする範囲が広いため、とっかかりを失わせがちになっていると思うことがあります。
- ・上演美術と展示美術では、やはり、出発点が違う場合が多いので、これらをカテゴライズした上で、横串発想につながるようなネットワーク構成ができるといいと思いますが、難しいですね。
- ・多角的な問題が多々あり解決することが困難な現状を、少しずつほぐしてゆこうというこの試みは、とても意義のある活動である。
- ・日本でアートの現場で活動する方の直面する問題点、今後の課題など共有できれば。

【A~E全般】について寄せられたコメント

- ・各地域にわかれていてよい。都心部ではみえづらい地域の事情が浮き出されることに期待。どの活動の根底にも潜む確信的な問題というのもあると思う。そこを捉えることができたときに、改善に近づく道が見えるのではないか。
- ・みないい。芸術環境改善は、目先の情報や物の流れを少し変えるくらいではなかなか難しく、構造的な問題一時として精神構造もーと長く対峙し続けられる忍耐力と精神力と経済力が必要。A-E いずれも含め、こうしたチャレンジが日本のアート界にたくさん生まれ、その中から経済的にも継続可能なモデルが育ち、それによって後進に希望を与えるような循環が育っていくことこそ、環境改善だと思います。
- ・私たちの団体は、子どもを持つ親たちが中心になって、子どもたちの文化環境を豊かにしたいという思いのもとに活動している。今回のプロジェクトへの応募も大それたことだったのかもしれないが、市の文化会館やさまざまなジャンルの芸術家の方々と共にこの6年間続けてきたフェスティバルを通して、地域の人々をも巻き込んだ草の根の文化振興が、子どもたちの文化環境を豊かに改善する方法ではないか、そしてそれは同時に、まちづくり、地域の活性化にもつながることであると思うようになった。私たちの取り組みは全国を視野に入れたものではないが、このような形はどこの街でも実現可能であると思う。ただ、まったくの素人なので、今回の5団体の改善策を拝見し、どれも「なるほど！」と思え、その完成度の高さに驚いた。公開プレゼンテーションが楽しみ。

- ・ ヒトミテ プロジェクトとFPAPの地方のアートマネジメント強化の企画、リアルシティーズの見巧者を育て、将来の正統な芸術表現者を育てる意識、山崎広太氏のアートコミュニケーションセンターを設立する構想など、芸術活動を通じた意見の交流を期待する声が具体的な形で示されているのを目にして、明るい未来が拓けそうで心がそわそわした。
- ・ 企画によっては、持ち出しの額がかなりのものになりそうなものもみられるが、活動の第三者評価後に、追加支援を行うことも検討してよいのではないか。
- ・ 都道府県をはじめとした厳しい地方財政の影響を受けて、各地の文化施設の運営などは混迷を極めている。これまでのように、美術館をはじめとした文化施設をつくることに重きを置くのではなく、全国各地に数多く設置されたこれらの施設をいかに有効に運用するのがそれぞれの設置者に求められている。一方で、これらの施設(美術館など)と現代美術(現在の美術/作品、作家、関係者)との関係は希薄に感じられ、日本における現代作家の意識は国内のこうした文化環境からますます離れていくのではないかと危惧している。海外に意識を転じると、現代アートや自国の文化資源に対する戦略・意識が高まっているように感じられ、国内の状況とはかけ離れているようにも感じられる。グローバル化する社会では芸術・文化の価値は一層高まるに違いない。A・Cなど芸術・文化環境の有効な改善策を講じる必要があると思う。また、長く続けていくには財政基盤の強化も必要。Bの個人寄付の問題を含め、必要なシステムの構築をはかるべきではないか。
- ・ 現場ですぐにでも実践可能なもの、「創客」へのヒントがつかめる内容が聞けたらと思う。現在自分が抱える現場の問題は山積しているが、アートマネジメントが必要であるという認識すらないところからまだ踏み出せていないのが現状。踏み出せない理由があるのか？もう1歩踏み出すには？その糸口でも見つけたい。
- ・ 自分の場からはなれて、プレゼンテーションに参加することで、新しい視点ややり方のヒントを得たい。それぞれの活動が、バラエティーに富んでいる点に興味をそそられた。
- ・ 全体的にアートやアートマネジメントに対する意識の改革に焦点をあてたKAIZENが多いように思う。自分としてもアートやその運営、アートファンドの立ち上げにとっても興味があるが、今の日本にそういうものが根付くのかいささか疑問に思う。
- ・ ITを利用したKAIZEN策が5つ中、2つもあり、そもそもその2者はIT界の今後の展望・将来性をどのように見つめた上で企画を考えたのか伺いたい。
- ・ ぜひとも見てみたい。いろいろな方のアートマネジメントの取り組みについては知りたいと思っていたので、ネット環境を利用していつでも見られるようにしていただけるのはありがたい。
- ・ ウェブで情報公開配信をするというアイディアはよい。アートマネジメントがなぜ必要なのか以前にアートがなぜ必要なのか、という認識を浸透させることが必要なのでは？
- ・ マッチング支援(「アート」を求めている自覚者同士を対象)や、アートの受け手・送り手の養成だけでなく、広く一般(潜在的な受け手・送り手)を視野に入れたプラン([A])が含まれていることは大変良いことだと思う。プラン[A]は、動画ポータルサイトの開設と、他のアートマネジメント系サイトとの連携とがプランの中心となっているが、それ以外の取り組みに興味がある。当然You Tube等、一般動画サイトへの動画のアップが考えられるが、作り出した映像コンテンツをウェブの中でどう広めていくのか、についての戦略を聞いてみたい気がした。サイトを作って更新するという、既存のアートマネジメント系サイトの輪の中にひとつの点を付け加えるだけの活動なら、役所が出す広報誌(最近、フリーペーパーをやたら出したがっている)と変わらない。やったという結果を残すだけでなく、効果を期待し、できればアートで食える状況をより多く作り出したと考えるなら、既存の一般メディアをどう活用するのかを考えているはずで、プレゼンではその点に期待したい。
- ・ ネットを活用した提案があるが、ITとアートマネジメントのリンクが今後もっと密になってくると思われる。
- ・ 動画としてのキャッチーさなどが課題か？ただのインタビューでは(ポイントにしている)一般の興味をひくことは難しいと感じた。
- ・ 物理的な作業は別として、多くの作業はWEB上で可能となり、地理的に交流ができなかった人と知恵を出し合うことができる。悲観的に見られるWEB世界の本来のよさを有効に活用できれば、おもしろい問題提議に賛同し、アートのみならずいろいろな問題にアプローチできるのではないか。そういった点では「ヒトミテプロジェクト」はおもしろいと思う。
- ・ 今回のご紹介していただく改善策は、どれも実際にアートマネジメントの現場にいる方がどのような問題意識を持っているのか、そしてそれを改善するためにはどうしていきたいのかが非常に明確であり、アートマネジメントを学ぶ者として非常に参考になる。特に、アートを社会活動の一つに取り入れること、また、「地域の視点」に立ったアートマネジメントについては非常に興味がありますので、ヒトミテプロジェクトには特に期待。どのようなものが見られるのか非常に楽しみ。

【A】について寄せられたコメント

- ・ アートマネジメントを語るとき、東京というより一部の人材に偏りがちだと思う。これを機会に、首都圏でのシンポジウムや、行政のアドバイザーの顔ぶれが変わったり、新たな出版の機会などが増えて欲しい。地域にはミニマムなコミュニティで成立する活動ゆえ、PR不足に見えがちな事業もある。そんな小さいながらも輝く星の大きな知恵を伺うことができると嬉しい。お話を聞く人のセレクション基準や、インタラクティブな仕掛けについては、どうするのか？また、アーカイヴスとして価値が出てきそうだが、今後の展開を伺いたい。
- ・ Aはこれだけの独立しての事業は難しいのではないか。
- ・ なぜ動画なのかについて企画書にもさまざまなデータを用いて解説されていたが、それをもってしても、未だ「なぜ動画なのか？」という疑問が残った。
- ・ 地域を越えた交流の促進という観点から注目している。
- ・ 地方自治体の文化行政担当職員として、文化政策や文化芸術全般の人材育成への取組(特に担当職員向け)が、実態の体制としても、意識としても不足していると感じている。その点で、アートマネジメントに関する情報や基礎知識を手軽に

得られる機会の充実に期待。

[B]について寄せられたコメント

- ・ 資金捻出に苦労している団体は多いと思うので、非常に楽しみ。
- ・ 私が、実践して、機能するか確認したい。完成が楽しみ。
- ・ 個人寄付の開拓という着眼点は面白い。一見可能性がありそうだが、実際に個人寄付する経済的余裕のある層は、数字でマネーを動かす傾向にある。数字を増やす要素としての魅力に欠けるアート分野に対しての投資に関して魅力を提示できるのか？なぜ芸術支援が必要なのか、を説得させる材料はあるのか？
- ・ 個人寄付の重要性については日頃からその必要性を感じている。
- ・ 現在の「アートマネジメント」のビジネス的側面と支援からなるもののバランスに関して興味をもっている。
- ・ 個人寄付を行なう方のリストアップなどが予定に入っていたが、もう少し具体的に知りたい。下世話な言い方だが、そういう富裕層にどうアプローチするのかという部分をもっと具体的にしてほしい。
- ・ ファンドレイジングの現状と課題を追求したい。
- ・ 欧米では博物館・美術館や芸術活動に対して個人の寄付行為が盛んというか定着しているように見えるが、日本ではあまり浸透していないと思うので、そのノウハウ開発について聞きたい。
- ・ アートマネジメントの最も重要な活動であるファンドレイジングのハンドブック作り、しかも個人を対象としたその活動に期待したい。ファンドレイジングは片手間にできる仕事ではなく、専門職として組織的に取り組む必要があるが、財政、組織基盤の脆弱な日本の芸術団体はそこまで手が回らないのが現状である。では、日本にはなじまないのかと言えばそんなことはないと思っている。まずは一人のファンドレイザーから始め、その一人の件費が賄えるくらいのがファンドが集まれば大成功というくらいの意識でスタートしてもいいのではないだろうか。なぜなら団体の収支は変わらなくても、ファンドレイジング活動の分だけ、その団体の芸術活動の意義が地域社会に認知され、理解が広がっていることを意味しているからである。こうした取り組みを始めの一步とするのが現実的と考えるが、一方で、多くの芸術団体は、それ以前に制作者やバックオフィススタッフさえ不在と言える現状がある。こうした環境下で、ファンドレイザーの育成と実践をどう切り開いていくか、大変困難な課題であると思う。それでも、ファンドレイジングのノウハウを示す今回の試みは、今後可能性を広げる大きな一歩になるのではないか。
- ・ ファンドレイジング活動の難しさを常に感じている。
- ・ 文化芸術層の厚みを増すためには、資金的な問題の解決が不可欠である。対処療法的なものではなく、芸術文化活動に資金が流入する仕組みを社会構造に盛り込むこと、そのためにも今後は、税制の工夫が必要かと感じる。
- ・ 作品上演を支える経済環境については、舞台活動を行っているほとんどの団体が苦労している。文化庁やメセナの助成金が、その大きな支えになっているという現実の中で、しかしそのあり方に、疑問を感じる事が少なくない。そんな中、「芸術団体のためのファンドレイジング・アクション・コミティ」については、特に興味がある。
- ・ 現場に行くと資金不足を実感する。金が無く給料を出せないことが、人を雇えず中心メンバーすら他の仕事を持たなくてはならないという人手不足と時間不足の状態につながり、それがプロジェクトのクオリティ低下や広報の不十分につながっている。団体が独自で採算の取れる形にすることが最も望ましいが、もし税制控除システムの変更に関係なく個人からの寄付が増えるような方法があるのなら、ぜひ知りたい。
- ・ 日本は寄付税制に問題があることはかねてから言われてきた。多少の改善は見られるものの、一般オーディエンスにとって個人寄付は雲の上の出来事。その垣根感をなくす手立てや、税制のさらなる改善にむけての動きはないものかと、常に感じている。
- ・ 個人寄付を開拓するという点に絞られたところに共感。どういう仕掛けをつくって、開拓していくかは、知恵の絞りどころだし、同じノウハウが少し目先を変えると、対象をほかにしても活用できるようになっているとよいのではないか。
- ・ これは、メセナの助成について勉強すると必ず疑問としてでてくると思う。私はなにがなんでもNPOにしてみようとかそういうのはどうなのかなと思っていたので、今回参加できたら、この方たちの提言にしっかり耳を傾けたい。
- ・ 【B】がとても聞きたい。今度アートマガジンを創刊するので、自分のアートプロジェクトの参考になりそう。
- ・ もともと日本人は寄付といえば福祉施設や災害地域への援助、国際NGO団体への援助にとどまりがちで、芸術に対しての個人レベルでの支援という発想がないように思う。この日本という国での開拓マニュアルをどのように作成していくのか非常に興味がある。
- ・ 綺麗ごとを並べても、やはり「資金面」は重要。インフレ気味の社会においては、企業からの資金援助を期待することも困難になっている。規模に関係なく、芸術分野では「資金源」を確保できないために埋もれてしまっている人材、芸術は多いと思う。ましてそれを伸ばすと長期間計画が必要となる。その場合、個人支援者にターゲットを絞ることは有効であると思う。ひとりのちから(1社・1団体の大きな力)をみんなのためではなくみんなのちから(小さな個人の力)をみんなのためという考え方もできるように思う。
- ・ 現状の日本には欠けている現象であり、「改善」されていくべき分野であると思う。
- ・ 公益法人改革に伴って、法人化や公益認定の相談が私たちに多く寄せられることが予想されますので、良い関係を築いていきたい。
- ・ 企画に賛同する立場からコメントする。ご承知の通り、米国と日本のNPOではファンドレイジングへの取り組みは大きく違うが、それは日本のNPOにノウハウが乏しいだけでなく、より根本的には、人的資源をファンドレイジングに投入できない組織の経営基盤の弱さがあると考えられる。この企画案ではハン

ドブックの作成のためにかなりの労力が割かれるように見受けられるが、私は、ある程度のハンドブック原案に沿って、2~3件のモデル団体と協働で実践事例を作ることが望ましいと考えた。ファンドレイジングに必要な知識・具体的な手法の検証だけでなく、必要なマンパワー（人的資質や人員数または時間数）の検証が重要ではないかと考えるからだ。また、成功イメージを持つことや、失敗事例から学ぶことも多くあると思う。それは、ハンドブックで伝えるよりも、小さなトライ＆エラーをお互いに共有することが有効だと思う。

[C]について寄せられたコメント

- 地方の人材を育てるということは必要。首都圏にすばらしい環境があるかといえば、実はそうでもないのが現実。九州と言う地域限定性ではなく、九州を発信源にして、全国組織的に育成や普及プロジェクトをやるということであれば、それはそれですばらしいと思う。
- ITとアートマネジメントのリンクが今後もっと密になってくると思われる。
- 企画としてもう一つ未完成に感じる。
- 既存のネット配信サイトで情報配信可能なのに、あえて新規立ち上げを行う必要があるのだろうか？
- 私自身、地方出身者のため、ネット配信によって地域格差がなくなることは、とても望んでいることだった。
- 地方在住者が情報や知識を得る手段として、通信を利用した学習機会を得るのはとても有効だと思う。ただ、アートに限らず、優秀な指導者や最善策は都心にあるとは限らないのではない。プロジェクトの初期段階だとは思っているので、これから発展が見込まれるはするが、「セミナーなどが都心でしか受けられない」という考え方は危険だと思う。優秀なアートマネージャーは逆に地方にこそ多くおられるし、単一的な情報の共有がよいとも限らない。その地方ごとのやり方があってしかり、その土地にあった方法が一番であり、文化的背景を十分に汲み取ったマネジメントの考え方を持っていた方が、「アート」に対しては有益ではないか。単なるセミナーのネット配信程度であれば、権利の問題を解消して、やろうとさえ思えば主催者権限で実現はいつでも可能。「環境改善」をうたうからには、そこから更に+αが欲しいと感じた。
- 地域を越えた交流の促進という観点から注目している。
- 地方自治体の文化行政担当職員として、文化政策や文化芸術全般の人材育成への取組（特に担当職員向け）が、実態の体制としても、意識としても不足していると感じている。その点で、アートマネジメントに関する情報や基礎知識を手軽に得られる機会の充実に期待している。
- 今回の企画だけでなく、FPAP そのものの活動にとっても関心をもっている。九州に所在しているからこそ説得力のある企画はこれからの地方におけるアートマネジメントにおいて学ぶことが多いような気がする。
- なかなか手が届かない東京以外の地域を巻き込んでいこう、あるいはその格差をどうにかしようという案もプレゼンを聞くのが楽しみ。

[D]について寄せられたコメント

- クリエイター側の環境改善を提示した唯一の人。スペース不足は深刻な問題だが、その改善案を享受できる人の数がキュレーター、創作者とも2-3名に限定せざるを得ないところがツライ。毎回人を変えて、こうした根本的な思惑をアーティスト間に普及させていくことを保証できるのか？あるいは、固定メンバーでのみのプロジェクトでしかないのか？
- 山崎さんのダンスセンターの構想に賛成。特に子どもがダンスに触れる機会を多くすることが人々にとってダンスが身近な芸術・娯楽になる一番の道だと思う。
- なんというか、顧客目線で見てワクワクしないのが気になる。
- 地域や他分野にアートの力を生かすには、そもそもアート・アーティストの力が高まらないと、創造性を生かした地域づくりその効果もあがっていかないものだと思う。つい、アートマネジメントは、非アーティストが担うと思ってしまいがちだが、アーティストがもっと力を発揮できるようになるためには、アーティストが行うアートマネジメントも非常に重要だと思う。アートマネジメント、と言うと、なぜか「お金集めや広報のテクニックのことでしょ」とか「文化政策は政策だから現場じゃない」と言われがちでもあるが、本来、アートマネジメントを担う人は、常にアーティストの考えることを感じることに寄り添い、創造・表現のためのよい共犯者となるべきだと私自身思っている。そういう意味で、ダンサー・振付家である山崎さんからの改善案に関心を持っている。
- 私はダンサー・振付家だが、アートマネジメントについて考えることは作品をつめていく上でも重要と思う。いったい誰に何をみせようとするのか。作り手側からアートマネジメントを考えるのはそのことをクリアにしていく上で重要。山崎広太さんが述べているように、アーティスト間の交流が少ない、もしくは交流の場がないということ。これは日本の体質的なところが大部分を占めているのが現状と思うが、数少ない「持ち出しなくてできる公演」を大勢の個人・団体がとりあっているのが現状がコンクールで優勝するのと同じような競争を生んでいるのだと思う。ですから手の内を明かさずにやっぴいこう、という考えが生まれ、それが交流を阻害していると思う。また交流を促進するようなプロジェクト等が少なく、実際行われるプロジェクトもスターを集めた交流であり、そのスター間も例えばハリハール公開による技術交流という観点からではなく、それぞれの作品を合同で発表する以上の成果はあげられていないと思う。そうではなく一人のアーティストとして他のアーティストと交流をもてる、そういう場とそういう考えを持つことのできる環境は私個人としてもとても欲しい。その点からこの提案はとても興味深い。
- 私もダンサーなので、山崎さんの意見が大変参考になった。
- さまざまな立場でアートと関わる人々の応募、案が集まったことに、大きな可能性を感じる。中でも山崎広太氏の応募、選出は特筆すべき点ではないか。演劇や美術関係者に比べ、自らの考えを言語化することの少ないダンサー・振付家が、製作やダンス界に対して、公の場でプレゼンテーションを行うことは、とても重要な出来事ではないか。ネットTAMの幅広い人々を巻き込んだ長年の活動が生んだひとつの成果なのだろう。
- Dは必要。きちんと息の長い振り付けの仕事ができる環境づくりを。

援を厭わない、長期的、継続的にプログラムを支えるパートナーである必要があると思う。アーキタンツスタジオが、そうした長期的、継続的なパートナーとして、があることを望むが、もしそうした体制は確約できないのであれば、今後、どのような場所の獲得のイメージがあるのか、それによって、プログラムの可能性はどのように変化するかをご検討いただければと思う。

【E】について寄せられたコメント

- 自分が勤める財団では演劇・ダンスの教育・普及を担当しており、年間数回の数日間ワークショップや年間1回の最終的に発表＝公演を行う形式のWSを実施している。これらは「専門人育成」という名目で実施してきたが、果たして公的機関で「専門人は育成できるのか」と疑問に思っており、個人的にはダンスや演劇に親しむきっかけづくり、仲間に出会う場、市民のお問合せ（劇団に入りたい、ダンスをみる場所は？など）に的確答えられ、舞台芸術に関する情報をいつでも供給できる場所であることをめざすことが普及・育成になるのではないかと思っている。でもこの地域でダンスや演劇を自分の表現手段としていきたいと思った人の次のステップというか、受け皿が近場がないのも心もとないとも思っているので、山崎広太さんのプレゼンは興味があり、そこから何かヒントを得たい。
- 山崎広太さんのスタジオシリーズが気になります。
- 日本では、コンテンポラリーダンスの創作を支援する枠組みが整っておらず、またこれまでは話題になることも少なかったのが楽しみにしている。もっともコンテンポラリーダンスをめぐる環境は、欧米でも必ずしも恵まれているわけではない。ただそれでもアメリカにはアメリカのドイツにはドイツのやり方があり、私自身はフランスにおけるコンテンポラリーダンス政策を研究しているため、それと比べながら発表を聞きたいと思う。また今回の提案がプロデューサーでもなく、研究者でなく、アーティストの側から出てきていることにも注目している。
- 舞台作品の創作、芸術創造および発表の過程と密接に結びついた、その案の具体性に興味がある。
- 新人振付家。新人ダンサーがもっと活躍、新しいものを作って行く為にそのためのスタジオがあれば…とは思う。踊れるスペースが少ない日本でももっともっと踊れるスペース、環境、チャンスを作っていくほしい。
- 私はダンサーとして活動していますが、山崎広太さんがおっしゃるように、日本におけるダンスの環境の難しさを日々肌で感じている。私の周りで活動するダンサーも環境の悪さに、夢をあきらめ、やめざるを得ない人がほとんど。山崎様のような提案が現実となることを心より祈っている。また、そのために私にもできることがあればできる限りぜひお手伝いさせていただきたい。
- アーティスト同士が余りコミュニケーションを持たなく孤立化する傾向、、、これはなぜなのだろうという疑問を普段から抱いているが、アーティストの個性、趣味、趣向ということだけでなく、環境の影響が大きいということがあると思うが、その環境をこの日本でどう作ることができるのか、それと同時にダンスが積み重なっていくための基盤、創作し続けるためには何が必要なのか、本当に考えなければいけないし、それができる状況を作らなければならない。「マネジメント側の決断」という言葉も重く受け止めた。
- 企画に賛同する立場からコメントする。ご提案の内容は、NYのDTWでの経験を踏まえた具体的な内容で、興味深く読ませていただいた。また内容だけでなく、日本におけるダンスコミュニティについて考えられている問題意識は、非常に共感した。企画内容の中で私が感じたのは、具体的な場所（アーキタンツスタジオ）の協力があるとのことだが、長期的、継続的な場所の獲得については、どのようなイメージを持たれているのか、ということだ。単なる公演ではないプログラムだからこそ、会場は、スペースだけでなく制作的な側面での人的支

- 観客を育てる・・・という視点に、興味を持った。これが、全国各地に広がる取り組みに展開すればいいのにとと思う。
- オーディエンス側の支援をするという新しい視点にも注目したい。
- 誌面、web サイトとメディアを持っている点を活かし、芸術文化を鑑賞する語ることが「専門家だけのもの」化しすぎてしまわないような、若いオーディエンスの育成、一般市民の鑑賞力の底上げ、のきっかけになればおもしろい。
- 必要を感じている。
- こうした発想にあたって、非常に危険なことには、劇場や芸術に関わっている人々と違って、多くの一般の人々にとって、劇場に足を運ぶことの魅力は理解されていないということ。あくまでも、閉ざされた少数世界内での出来事に過ぎない。応募して来るのはおそらく、数名のすでにある程度熱心なファンに限定されるのではないかと？彼らを育てることで、劇場に一度も足を運んだ事のない人々に何か影響を与えることができるのか？
- 日本の芸術をめぐる環境について日頃感じるところが、多少の差はあれ老若男女を問わず、自立的・主体的なオーディエンスの弱さの問題だったので、【E】のKAIZENN提案は大変興味深い。
- 一番共感できる。顧客なくしてアートは社会で成立しえない。そういう意味で、立ち位置がわかっている企画だと感じる。絵画においては、デッサン力。ダンサーにはストレッチと基本レッスン。アートマネジメントには、芸術に対する感性を磨くことと、作品に対するリテラシーの向上。Back to basic. 基本をしっかりとっていくこと。時間はかかるけれど、結局は意味のある結果を生むための最短距離なのだと思う。
- 自己陶酔で幼稚さの目立つ作品があまりにも多すぎると思う。現在の日本アート界は制作も作り手も食事に喩えると、モスバーガーのようにマクドナルドよりもちょっと高くオシャレな全国チェーンをめざして、本当にいいものを作る職人になろう、もしくはそう育てようという意思に弱いと思う。作り手はたとえ貧しくても本物を知っておかなければいけない。服装や食べ物もちろんデザイン、絵画、彫刻、舞台なども知らなければ自己陶酔に陥るのは当然と思う。適度なレベルの量産を重視や、一時的なスター育成をめざしているのでは日本アートは衰退していく一方と思う。決して派手でなくてもいいものを知っていくこと、創りだしていくことが重要と思う。また観客としても同じで、スターを観にいった作品を見に行かない、そんな傾向もあると思う。作り手も育ていかねばならないし、観客も見る目を養っていく必要がある。そのために支援プログラムは必要と思う。

- ・ オーディエンスインレジデンスはおもしろいなと思った。でも、日本でやるとなると観られるモノは限られてくる気がするが、どいうのを想定しているのかを聞いてみたい(そもそも美術館は学割があるし、高くして学生がいけないものとなると舞台系)。海外の美術館やギャラリーをたずねる研修旅行のようなものを企画し、旅費を補助するという企画があったらいいなと思った。あと、レビューだけでなく、作品展もするといい。
 - ・ 将来表現者となる若者に優秀な作品を鑑賞する機会を提供するというアイデアはとてもおもしろいと思いますが、いくつか疑問を感じた。実行委員会推奨、①指定作品にジャンル等の偏りができるのではないかと、②「見巧者」を育てる、という第一目標は果たして鑑賞する、レビューを書く、という行為だけで成し得るのか、③プロジェクトに参加した若者の作品にどのような影響が現れるか、といった evaluation はどのように行うのか。
 - ・ 最もだと思う。アーティスト志望の学生だけでなく、アートマネージャー志望の学生も対象にしたほうが良いと思うが、こういうことはぜひやって欲しい。
 - ・ オーディエンス・イン・レジデンスに大変共感する。「見られる側」をめざす若者を、まず「見る側」として育てることで、鑑賞者と表現者の双方をつないでいこうという試みは、とても良いと思う。
 - ・ 大学で舞踊を専攻。海外では舞踊学はどこでも学べるポピュラーな学問であるのに、国立では本大学でしか学ぶことができないという、舞踊を始めとする芸術の学術的未発達を感じている。さらに、どんなに優秀なダンサーでもダンサーだけで生計を立てていくのはかなり難しいことも先輩方から伺っている。舞踊自体の一般の方々の認知度も低いように日頃から感じている。芸術に日頃から携わっている人だけでなく、芸術がもっと広く親しまれるようになるにはどうしたらいいのか、そのようなことを日々感じながら、学問に励んでいる。
 - ・ 大学で舞踊を専攻している。舞踊の認知度の低さはつくづく実感している。そのため、舞踊を日本に普及するためには、芸術としての舞踊がこれからどのような展望を迎えるのか、日々考えている。アートマネジメントに興味があり、現在どのような試みがなされているのか知りたい。
 - ・ “幼稚で一発芸的なものが溢れかえり、「子供っぽさ」に開きなおるような”という表現は、とても共感する部分がある。その点へのテクニカルな部分の育成については、確かに“才能ある若者に名作を鑑賞する機会”を提供することである程度有意義なこともあるだろうが、私が個人的に感じているのは、若いアーティストが現代を生きる者としての、問題意識であり、またこの現代社会の中で「芸術がどういう社会的意義を持ちえるか／持つべきか」という、表現者のとしてのプライドと責任感の希薄さだと思われる点だ。海外の表現活動とくらべての「稚拙さ」につながっているようにも思えるし、また、日本の表現者はこれからの時代、そういう「社会の中での客観性」も同時に持っていかなければ、未来はないと考えている。この支援プログラムは、表現活動の向上を刺激するために非常に素晴らしい機会の提供だと思うが、ひとつの鑑賞体験が、表面的な部分にとどまらず、その背景や精神的根拠についても考える機会となれば、なお頼もしい。
 - ・ 「オーディエンス・イン・レジデンス」の対象はなぜ「表現者をめざす学生」なのか？これからマネジメントに関わっていく人たちにも支援が必要だと感じる。作品を創る人、観る人、両方
- を繋げるためにも鑑賞者への支援も忘れてはいけない気がする。なのでなぜ「表現者をめざす学生」だけが対象なのか質問したい。よろしく願います。
- ・ 対象者が、一人のひとに継続的に一流のプログラムを見てもらうのか、それとも広く浅く、一人でも多くの人に劇場に足を運んでもらうことに重きをおくのかプレゼンの時に留意して聞きたい。このような試みは、効果がでるまでに時間がかかる(10-20年)ものだと思うので、スパンをどう捉えているのか気になる。
 - ・ 観客創造におけることが、日々の課題。すでに舞台芸術の魅力に気付いてくださった方に足を運びつづけていただく事はもちろん、潜在的に「舞台芸術に触れてみたい」と感じて下さっている方が公演に足を運んでいただける環境を作ること。そして、全く興味の無い人に対してどのような形で舞台芸術が時間を過ごす「選択肢」の候補にあがるのか。今回は【E】で観客に対するアプローチの企画があるので、是非お話を聞いてみたい。